

『大豆生産振興の課題と方向』

梅本 雅・島田信二 編著

食料・環境領域 主任研究官 佐藤 孝一

本書は、農業経営研究分野の研究者と栽培・育種研究分野の研究者との共同研究の成果です。大豆作を対象に、技術、経営、流通、消費、そして制度・政策の観点から、生産から加工、流通、消費の実態を総合的に把握し、課題を明らかにしています。

「はしがき」で、本書の分析の特色が記されています。一つは、大豆に関わる経済的、技術的側面の総合的な解説を行うとともに、経済的なシステムとしての大豆の生産流通全体に関わる問題点の指摘。次いで、米国との国際比較を通じて、大豆収量の高位安定化を図る技術的条件の解明。最後に、大豆作経営だけでなく、加工業者の分析も行い、新たなビジネスモデルを提示している点です。

以下、本書を手取る際に参考となるように、簡潔に内容を紹介します。

本書は、第1章から終章までの8章と第5章のなかの補論から構成されています。第1章（大豆生産流通消費の現状と課題）では、「日本の大豆作における収量の低位不安定性や、助成金に依存して価格や実需者のニーズに反応しないという構造を改善する必要がある」との問題意識のもと、大豆の生産、流通、消費の動向に加えて、大豆作に関わる制度・政策の変化を整理しています。第2章（大豆加工製品の消費動向と特徴）では、納豆のPOSデータを用いて消費動向を整理しています。第3章（大豆の多様な用途別需要と企業の製品戦略）では、伝統的な大豆食品に加えて、健康機能性に着目した新食品の開発など大豆加工企業の製品戦略を扱っています。第4章（国産大豆流通の特徴と制度的課題）では、国産大豆の品質評価について生産者と加工業者との認識の差異や品質評価の課題が指摘されています。第5章（日米における大豆生産技術の現状とわが国の課題）では、日本の単収停滞の技術的な要因を、高単収を達成している米国と比較して分析し、改善方向を示しています。補論（米国イリノイ州の大規模大豆作経営の現状と特徴）では、米国の大豆作経営の実態調査における事例が紹介されてい

ます。第6章（大豆作に関わる制度変化と経営展開の方向）では、調査事例から大豆作経営の収益構造や経営対応を整理し、大豆作定着に向けて制度面での課題や改善を指摘しています。第7章（大豆生産者と大豆加工

メーカーの連携による新たな大豆ビジネスモデルの形成）では、加工業者と生産者との直接取引の事例から新たなビジネスモデルを考察しています。終章（大豆フードシステムの再編方向）では、認知構造分析という手法によって大豆作に関わる問題構造を把握し、新たな大豆フードシステムの構築に向けた改善案を提案しています。「生産者と実需者の距離を近くし、相互の事情やニーズを把握できる体制を広く構築していくこと」が必要であると提起されています。

以上、本書の内容を紹介してきましたが、本書は大豆の生産から、川中・川下にあたる流通、加工、消費に対する分析も行い、大豆のフードシステム全体にかかわる考察を行っています。そして、これからの大豆作、さらには加工・流通、消費を含めた大豆のフードシステム全体を捉えるうえで、新たな視座を示しています。現状の検査制度における品質評価だけでなく、加工適正を組み込んだ品質評価の実施、大豆作への生産者のインセンティブを高める体制の構築など今後の大豆作の方向について具体的な提案を行っています。研究者のみならず、大豆に関心がある方には良書であり、お勧めです。

大豆作には、経営面だけでなく、技術的な面での課題も多くあります。そのため、農業経営研究と栽培・育種研究との連携は必要です。そうした意味からも、本書はこれからの大豆をめぐる課題の解決に向け貴重な研究成果といえるでしょう。



『大豆生産振興の課題と方向』
編著者／梅本 雅・島田信二
出版年／2013年3月
発行所／農林統計出版